

平成26年度第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会 議事録

日 時 平成26年9月12日（金）18：30～21：15
場 所 熊野市文化交流センター多目的ルーム
出席委員 大森 達也、野地本 道也、尾崎 しほ子、杉松 道之、西 章、
榎本 健治、大久保 彰人、寺本 幸治、檜山 祐一、久保 治也、
廣畑 勝也、大前 裕哉、辻本 誠一、山本 健司、寺本 育史、
谷合 徹、堀川 恭太、新谷 武文
欠席委員 田岡 隆 (以上敬称略)
(事務局) 高校教育課長 長谷川 敦子、教育改革推進監 宮路 正弘、
教育総務課班長 辻 成尚、
教育総務課 上村 和弘、西 達夫

開 会 (事務局)

皆様方におかれましては、ご多用の中、ご出席いただきありがとうございます。
ただ今から、平成26年度第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会を始めます。

まず、お手元の配付物を確認させていただきます。事項書が表紙となっております
2カ所留めの配付資料、それから、座席表と委員名簿を両面印刷したものの2点でござ
います。不足等ございませんでしょうか。

なお、開催案内の文書でもお知らせいたしました。本協議会は公開で行います。
また、ご発言等はすべてマイクを通していただきますようご協力をお願いします。

それでは、事項書に沿って進めさせていただきます。開催にあたりまして、三重県
教育委員会事務局教育改革推進監宮路正弘からご挨拶申し上げます。

1 あいさつ

(事務局：宮路教育改革推進監)

皆様、こんばんは。本日はお忙しい中、また、お疲れのところ、第2回紀南地域高
等学校活性化推進協議会にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

前回、7月に開催させていただきました第1回の協議会におきまして、当地域の高
等学校を取り巻く状況について共有をさせていただいたところです。また、今年度の
協議の進め方や、木本高校、紀南高校の活性化に向けた取組についてご協議いただ
いたところです。

本日は、前回ご確認いただきました協議の進め方に沿いまして協議を進めたいと思っ
ております。事項書にございますように、1つ目は、「生徒の進路実現につながる「学
力の向上」を中心とした小・中・高連携の推進」について。2つ目として「将来的に
新たな学校を設置する場合の「育てたい地域の子ども像」及び「期待する学校像」
についての協議を予定させていただいております。

ご承知のとおり、当地域の子どもたちの大部分は木本高校、紀南高校に進学してお
り、高校卒業後の進路を含め、子どもたちの将来に向け、小・中・高の12年間のス

パンで校種を越えて連携し、しっかりと育てていくことが大事だと思っております。

また、この12年間の中でいかに子どもたちを育てていくかについては、その次に協議をいただく今後の高校のあり方にも大きく関係するものと思います。

こうしたことを踏まえていただき、本日の協議につきましては、今の在校生をはじめとして、この地域の子どもたちにとって、より魅力ある教育環境を整えることにつながるようご意見をいただければと思っております。

本日はどうぞよろしく申し上げます。

(事務局)

田岡委員は公務がございまして、本日、ご欠席の連絡をいただいております。

それでは、大森会長からご挨拶をいただき、その後の議事進行をお願いします。

(大森会長)

今回は、まず前回協議会の振り返りを行うとともに、前回も出ました小学校卒業者の中学校への進学状況、紀南高校、木本高校の進路状況についてのデータを見ていただくことで、現状を皆様と更に共有したいと思っております。

また、先ほどの宮路教育改革推進監からの挨拶にありましたように、「生徒の進路実現につながる学力の向上」ということが、本日の協議事項になっています。今後のこの地域のまちづくり、地域の活性化に関わり、学校は生きる力を育てるところだと思いますが、生きる力の一つである学力についても、皆様と全国学力・学習状況調査の結果をもとに協議させていただきたいと思っております。

これらを受けまして、2校の活性化を推進することは当然ですが、同時に、前回からお願いしております将来的に新たな学校を設置する場合の学校像についても、考えていかなければならない時期だということでした。今日は「新たな学校を設置する場合の「育てたい子ども像」及び「期待する学校像」」についての協議も行いたいと思っております。

私が事務局と相談させていただきまして、限られた時間の中で協議を進めていくために、事前に意見集約の紙をお出しいただきたいとお願いしました。本当に無理なお願いをして申し訳ございませんでしたが、ご協力ありがとうございました。

21時までという時間の限りがございます。ご協力のほどお願いします。

それでは、事項書2の「確認・報告事項」に入りたいと思っております。1番目は、「平成26年度第1回紀南地域高等学校活性化推進協議会における主な意見について」です。事務局から説明願います。

2 確認・報告事項

(1) 平成26年度第1回紀南地域高等学校活性化推進協議会における主な意見について【資料1、2】

(事務局：辻班長)

それでは、ご説明します。資料は1ページの「資料1」をご覧ください。前回、第1回の協議会は7月11日の開催でしたが、そのときに出された主な意見をまとめてあります。時間の関係で全部は読みませんが、少しずつ紹介させていただきます。

1つ目の意見は、2校を統合するとしたら、災害等に対して安全な学校をつくって

いく方向で、どんな学校をどの場所に設置するかを議論していったらどうかというご意見。

2つ目は、両校を存続させるにせよ、統合するにせよ、魅力ある学校にしていくために活性化の取組を進めていくことは大事であるというご意見。

3つ目は、1校となり学校を選択できなくなるのであれば、子どもたちに魅力を感じさせる学校にしていかなければならないというご意見。

4つ目は、校舎制についてのご意見でした。校舎制での存続の可否をしっかりと見極めたうえで、期待する学校像の議論に入っていくことが望ましいのではないかとご意見。

5つ目は、1学年5学級以上なければセンター試験に対応できる授業展開をするための教員配置は難しいということについて、より具体的で分かりやすい説明や資料を求めたいというご意見。

その次は、小学校・中学校・高等学校を通して何を学び、それをどう生かすかを考えていける人材を育てていくことが、将来的な地域の活性化につながっていくというご意見。

2つ飛ばして、2校存続に向けた活性化は当然進めていくが、子どもの数の減少は避けられないので、統合に向けた方向性を議論し、ビジョンをまとめていく必要があるというご意見。

最後は、進路に関するご意見で、地域の活性化には地元への就職者が離職して他の地域へ出ていってしまわないことが大切であるというご意見。

このようなご意見をいただきました。

少し戻り、同じページで5番目のところをもう一度見ていただきたいと思います。1学年5学級以上なければセンター試験に対応できる授業展開をするための教員配置が難しいことについて、より具体的で分かりやすい資料を求めたいというご意見があります。前は資料を持っておりませんでした。高校が1学年5学級以下、4学級、3学級になっていくと、理科や社会の中で設置できない科目があるようだとお答えしたと思います。このことについては、これまでの他の地域の協議会でも同様の検証をした資料がございましたので、次のページの「資料2」に載せました。この資料は、2、3年前に作成したのですが、同じような検証を他県でも行っていました。

公立学校については、学校の学級数により教職員の定数が法律で決まっています。具体的には「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」で決まっていますが、実際には様々な要因、例えば新規採用の教員が複数配置されたり、県の生徒指導や進路指導の事務局をしている教員がいたり、もしくは国の事業を受けた場合等に教員が加配されたりすることがありますので、必ずしも法律どおりになっていない部分があります。そこで、実際にある学校で教員が何人いて、どれぐらいの講座が開設されているかを検証したのが、この「資料2」です。2、3年前のデータですが、A高校からF高校まで県内の実際の高校で1学年の学級数が8学級から3学級の高校を調べてみました。比較しやすいようにすべて普通科の高校で、単位制をとっていない高校を選んであります。E高校やF高校は1学年が4学級、3学級のところです。例えばF高校では地理A・Bの授業が設置されていませんし、E高校とF高校

ではどちらも物理の授業が開設されていません。特に物理は理系の大学への進学に必要な科目ですが、その科目が設置されていないということが分かります。このほか、2学級の普通科高校のデータも掲載しようと考えたのですが、該当する高校が南伊勢高校の度会校舎だけであり、分校ですので例としてはあげていません。他の地域協議会での検証に使用した資料ですが、4学級以下の高校ではいくつかの科目が設置されておらず、センター試験の受験が必要な大学への進学が難しいのではないかと検証した資料として見ていただけたと思います。

項目1についての説明は以上です。

(大森会長)

それでは、ただ今の説明について何かご質問・ご意見等ございますか。

(樫山委員)

普通科の教育課程における各教科の科目数となっていますので、当地域の木本高校や紀南高校を照らし合わせるとすれば、木本高校の普通科が2学級や3学級なので、このF高校で見るのですか。普通科の教育課程と捉えたらいいのですか。それとも、総合学科も合わせた学校全体の学級数で見たらよいか、分かりくいのですが。

(事務局：辻班長)

この資料の中の高校は、木本高校、紀南高校ではないですが、一般的に学級数が少なくなっていくと、この資料のように科目が設置できない状況が起こるというデータです。木本高校については、今、1学年で普通科が3学級、総合学科が2学級になりますので合計5学級ですが、おそらくこのD高校の5学級よりも教員数は多くなっています。総合学科というのは多くの教員が配置されます。ただ、その分、総合学科ではいろいろな科目を開設しなければなりませんので、多くの教員がいて当然なのですが、教員が多くいる分いろいろな科目の授業が行われているということです。ただ、センター試験の受験に必要な科目は、教員数がこれ以上少なくなっていくと、専門性を持った教員が指導することが難しいという状況です。

紀南高校は現在3学級ですが、単位制の普通科ですので、F高校の例よりも教員数は若干多いのではないかと思います。

(大森会長)

何かほかに質問・ご意見等ございますか。

(西委員)

資料の提供をありがとうございます。これですべてのことを理解するのは、大変難しい話だと思います。今、紀南高校は単位制高校であるから教員数が若干多いという話でしたが、私の調べでは、常勤の講師も入れて34人ぐらいかと。これは名簿で拾いましたので、実際、中がどうなっているか私には分かりません。基本が27人で、どういう関わりがあるか、それはこの資料では分かりませんが、感じとしては、34人ぐらいプラス非常勤講師が15人ぐらい入っているのではないかと思います。

そういった配置が可能であるなら、この資料に示された以外に、もう少し対応ができるのではないかと、その余地は残っているという理解でよろしいですか。

(事務局：辻班長)

先ほど言いましたように紀南高校は単位制の高校で、確かにこのF高校より教員数

が多いと思われます。委員がおっしゃった34人というのは校長や教頭も含めた数になるのではないかと思います。ただ、単位制の高校ですので、このほかにも学校設定科目など多様な科目を置いていますし、それでないと単位制とはなりません。この受験だけに特化した科目だけで充実したことができるかという、そういうことでもないかと考えています。単位制であるがゆえに受験に特化した科目以外にもいろいろな科目を置かれていると思います。単位制で教員数が一定数多くなっている、それで対応できるかという、必ずしもそうでない部分もあると思います。

(大森会長)

西委員、堀川委員から説明してもらったほうが、現状が分かるのではないかと。

(堀川委員)

現在の本校の教員の定数状況について説明します。ベースは27人で、それにプラス1人が単年度加配です。単年度加配といっても毎年継続をしていただいて、28人です。また、ここ何年かは3人の加配をいただいております。その内訳は、学力進路保障に係る1人、ジョブサポートティーチャーに係る1人。それから新規採用教員を毎年複数配置いただいておりますので、新規採用教員2人につき1人加配が付きまします。ということで、ここ数年は、ベース28人プラスアルファの加配ということで31人が現状です。

(大森会長)

ベース27人に常時加配が1人、そして、学力サポートの加配で1人、ジョブサポートの加配で1人、新規採用教員配置への加配で1人ということですね。

(西委員)

近くに近畿大学附属新宮高校があります。その生徒数が、1年生が135人、2年生が150人、3年生が114人の計399人です。1年生から4・5・5という学級数でやっています。これはホームページ等で調べたのですが、35人の教員、講師が9人となっていますが、大学進学についてもかなりの実績を上げていると思います。理系でも国公立大学の医学部へも、また、文系のほうも行っていますので、相当広い範囲で教員をそろえているのではないかと思います。もちろん非常勤講師もおりますが、35人の正規採用であれだけの実績が上げられ、部活もかなり盛んにやっています。素人考えですが、こういったことが可能であるなら、公立でもできないのかという素朴な疑問は地域住民にもあると思います。その辺についてはどうですか。

(事務局：辻班長)

このようにデータをまとめましたが、三重県の中では4学級、3学級規模の高校で、進学者の多い学校を見つけることができませんでした。くまなく調べたわけではないですが、全国的に公立高校を見ても、4学級以下で進学者が大きな割合を占める高校はなかなか見つかりませんでした。

私立高校については、私も詳しいことは分かりませんが、多くの高校が中高一貫という形をとっていて、中学校の段階で高校の先取り学習をしていることもあったり、転勤もなく固定された教員が進学チームのような形を組んでいたりとすることもあります。公立高校が参考にする部分も出てこようかと思いますが、私立高校と公立高校では少し状況が違っていると思います。

(大森会長)

近畿大学附属新宮高校については、まさに大学の附属という特性もありますので、ここで紀南高校や木本高校と同じ組上には乗らないと、私は判断します。それぞれの私立学校は建学の精神等に基づいて教育を行っていますが、公立高等学校は三重県教育委員会の方針、もしくは文部科学省の方針に基づいて、法令なり条例が定められて行われているのは、西委員もよくご存じだと思います。ですので、近大新宮ができるから、ここでもできるのではないかとと言われてしまうと、三重県の教育の全体の話と関係してきますので、少し違うかという気がしますが、いかがですか。

(西委員)

私が言っているのは、ここにあるセンター試験に対応できる授業展開をするための教員配置が難しいという件に関し、近大新宮高校の例をあげたわけです。35人という教員数で十分対応しているのではないかと。もちろん先ほど会長がおっしゃった建学の理念などの違いは分かりますが、今言ったセンター試験に対応できる授業展開をするための教員配置等に関わって、もし先ほどの話でしたら、その辺は分からない部分もあるというのでしたら、これを説明していくためには、近大新宮高校がこの教員数、この生徒数でできているというあたりの調査もしていただいたうえで説明していただかないと、よく分かりましたということにはならないかと思っています。

(事務局：辻班長)

聞き取って調査したいと思いますが、先ほど申し上げましたように、私立と公立では、中高一貫教育の形をとって先取り学習をしているとか、教員の異動がないという点で条件が違う部分もありますので、必ずしも同じようにいくとは考えられないと思っています。

(大森会長)

次に行かせていただいでよろしいでしょうか。

「紀南地域の高等学校を取りまく状況について」、事務局から説明願います。

(2) 紀南地域の高等学校を取り巻く状況について【資料3、参考資料1】

(事務局：辻班長)

続きまして、資料の3をご覧ください。

今回は時間をたくさんいただいて、データの資料を多く見ていただきました。この資料3につきましては、前回の段階では調査中でしたので、今回お出しします。この地域の小学校卒業者の中学校への進学状況についてですが、一番右側の合計欄をご覧ください。「H26.3卒業生」というところです。一番上の「358」がこの地域のこの3月の小学校卒業生数です。このうち、地元の中学校に進学した生徒が337人、94.1%ということです。それ以外に21人がこの地域以外の中学校に進学しています。この21人の内訳を見ていくと、特別支援学校の中等部に進学した生徒が2人、県内の私立中学校に進学した生徒が1人、県外の国公立中学校、おそらく一家転住だと思えますが、2人となっています。一番下の16人が、県外の私立中学校への進学で、すべて近大附属新宮中学校です。

傾向を見てみますと、その横に18人とありますが、この2年間は近大附属新宮中

学校へ進学した生徒が多くなっています。その前年は8人でした。今年は去年よりは2人減っていますが、この2年間、近大附属新宮中学校に進学している生徒が増えていることがデータから見ていただけたと思います。

市町別に分けると、その左側の熊野市、御浜町、紀宝町の区分のようになります。少し飛びますが、22ページをご覧ください。前回見ていただいた資料ですので、詳しく説明はしませんが、中学校卒業者の推移と予測ということで、今後、中学校の卒業生数はこのように減少していくということをお話しました。このデータに関わって、榎本委員から、この中で特別支援学級に在籍する児童生徒はどれぐらいかという質問をいただきました。前回、データがなかったのでお答えできませんでしたので、本日お答えさせていただきます。この「H27・3 現中3」は、340人となっていますが、このうちの5人が特別支援学級の在籍者です。その次の学年が7人、その次が5人です。小学校では少し人数が増えますが、それでも平均して1学年あたり9人～10人です。

(大森会長)

この説明につきまして、ご意見、ご質問等ございますか。榎本委員、よろしいですか。

(榎本委員)

いいです。

(大森会長)

それでは、事項書3の協議事項に入りたいと思います。最初の協議事項につきましては、「(1) 生徒の進路実現につながる「学力の向上」を中心とした小・中・高連携の推進について」ということです。

この協議を行うにあたり、まずは現状把握をしていきたいと思います。はじめに事務局から資料4と5について説明願います。

3 協議事項

(1) 生徒の進路実現につながる「学力の向上」を中心とした小・中・高連携の推進について【資料4～8、参考資料2～4】

(事務局：辻班長)

引き続き、4ページの「資料4」をご覧ください。この資料は、前回にも出した木本高校・紀南高校の進路状況の資料です。「就職」の部分を少し詳しく記載しています。前回のご意見の中にも、地域の活性化には、出て行ってしまわずに地元で就職することが大切というご意見もありました。そのことが一つのキーワードと考え、「就職」を地元の部分とそれ以外の部分に分類しました。

最初に、下の紀南高校のところをご覧ください。紀南高校の平成25年度のところです。就職が69人、63.9%です。これを「東紀州地域(含む近隣県外)」とありますが、通勤可能な地域という考え方から、特に新宮市内等の近隣県外も含めて、「東紀州地域」としています。そこが36人となっています。69人の就職者のうちの36人です。69人を100%と見た数値ではないので、分かりにくいかもしれませんが、36人というのは、全体の63.9%にあたる69人の半分以上で、33.3%

にあたります。その横の10.2%と20.4%を足すと、左側の63.9%になります。

ここ2年ほどを見ていただくと、就職者の半分以上が新宮市を含む東紀州地域となっています。その割合がこのところ高くなっているということが見ていただけたと思います。

木本高校総合学科については、専修学校への割合が高いので就職は紀南高校ほどの割合ではありませんが、平成25年度は36人、そのうち3分の1の12人が地元就職しています。年によって4分の1ぐらいのときもありますが、そのような割合となっています。この割合については、この5年間で大きく傾向は変わっていないと思います。

木本高校は四年制大学への進学が多いので、就職者はデータ上ほとんどありませんが、進学でいくなれば、専修学校の割合が少し下がってきて、四年制大学の割合が増えているというのは、前回、紹介したとおりです。以上、資料4の説明です。

次に、「資料5」ですが、この協議事項、「進路実現につながる「学力の向上」を中心とした小・中・高の連携の推進」ということですので、まずは学力の定着と向上に係る県教育委員会が市町に支援している中身についてデータをあげました。学力の定着と向上を図る取組を推進するため、実践推進校を指定し、少人数教育を支援するための非常勤講師の配置などを行っています。具体的には、その表の中にありますように、指定校には非常勤講師を16時間、配置しています。平成25年度はこの地域の31校中、5校がその指定を受けております。校数ではなかなか比較がしにくいので、県全体の割合も示させていただきました。平成26年度はこの地域で県全体の30%指定されています。

もう1つは、授業改善に係る指導体制の充実として、例えば、授業研究で参考事例を提供したり助言したりする学力向上アドバイザーや県教育委員会の指導主事の派遣です。平成25年度は派遣回数が128回、平均すると1校あたり4.1回になります。県全体との比較を下に書いてあります。今年度については、8月までしかデータがありませんので数が少なくなっています。

(大森会長)

この資料4、資料5についてお聞きになりたいことがありましたら、挙手をお願いします。よろしいでしょうか。

では、続きまして、平成25年度の全国学力・学習状況調査の結果について、熊野市、御浜町、紀宝町の順で委員である各市町の教育長から説明をお願いします。進行の都合上、各市町とも5分程度でお願いできないでしょうか。なお、御浜町につきましては、田岡委員が本日欠席ですので、熊野市の後に5分間ほど時間を取りますので、報告を皆様でお読みいただくようお願いいたします。

それでは、熊野市の杉松委員をお願いします。

(杉松委員)

資料としましては、6ページ、「平成25年度の全国学力・学習状況調査結果の概要」ということで、これは今年の11月に各保護者あるいは各評議員、各報道機関に公表した内容です。同じく、平成26年度も既に9月の中旬に保護者、評議員、各報

道機関に同じようなパターンで公表をしております。

平成25年度、26年度ともに、ほぼ同様の傾向が見られており、学力調査の結果につきましては、小学校では学力の結果について深刻な課題がある。特に国語が課題、課題というよりも問題であると言ってもいいと思います。経年で比較しますと、小学校では算数は多少改善の傾向が見られる状況です。

中学校では、全国の平均正答率との差が小さくなってきております。特に数学は全国平均と比べて差が小さい結果となっております。国語については課題があり、経年で比較しても状況の変化が少ないということです。

児童生徒の質問紙調査の結果ですが、小学校の回答状況からは、児童の授業に対する意欲が高いところも見られましたが、テレビゲーム等をする時間については、平日2時間以上と答えた児童が約4割もおります。家庭学習につきましては、予習・復習・計画的な学習を含めて質、量、共に少ないという結果が出ております。今年の例ですが、具体的には、1日あたりどのぐらい勉強しますかという質問に対し、1時間以上と回答した児童の割合が、熊野市では41.5%に対して全国では62%という状況でした。

中学校の回答状況からは、生徒の授業に対する意欲が高いところも見られますが、家庭学習につきましては、質・量、共に少ないという結果が出ております。家庭学習が少ない割には学力調査の結果は全国平均に近い部分があるので、これはどういうところが原因かと今、分析しているところです。

今後の市としての学力向上に向けた取組ですが、各小中学校の以下の取組を提起しております。国語科においては、単元を貫く言語活動の実践をやっていこうと考えています。小中共に特に国語の活用に関する課題があります。そのためには単元を貫く言語活動についての方向を具体的に提起したいと思っています。そのことで課題の見られる子どもたちの表現力、書くことの改善につなげていこうと考えています。

また、理数教科において、めあての提示と振り返り活動を取り入れた授業を徹底していこうと考えています。子どもたちが授業の見通しを持つことによって、主体的な学習態度を育むとともに、子どもたち自身が振り返りを行うことで学習内容の定着を図っていこうと考えています。

そして、大切なのは家庭学習の充実であり、課題となっている家庭学習の充実を図れるよう、手引きを作成したり、それを配付して生活チェックシートの活用をしたり等、学校が何らかのアクションを起こしていこうという提起を研修会の中でしております。

大体、以上のようなことです。

(大森会長)

ありがとうございます。先ほど言い忘れましたが、23ページ以降に「参考資料2」としまして、三重県全体の平成25年度の全国学力・学習状況調査の結果についてというのが掲載されておりますので、こちらも参考としてご覧ください。

それでは、御浜町ですが、委員が欠席されておりますので、19時10分ぐらいまでご覧いただければと思います。

～ 各委員が御浜町教育委員会から提供された資料を確認 ～

次、紀宝町の西委員をお願いします。

(西委員)

紀宝町もご覧のとおりですが、平成25年度におきましては、小中7校の全保護者にこれを配付するという公表の仕方をしております。ご覧のとおり、まず、国語A・国語Bともに平均正答率が大変低い状況です。国語Aでは、目的に応じて資料を読み、分かったことを的確に書くこと等に課題がありますし、国語Bでは、目的や意図に応じ複数の内容を関連づけながら自分の考えを具体的に書くこと、目的や意図に応じ必要な内容を適切に引用して書くこと等に課題がある。読んで考えて判断するといった過程において、しっかりとした回答を出すところにまだ至っていないという状況です。今年度の問題についても、国語Aでしたら「五十歩百歩」、あるいは「百聞は一見に如かず」というような故事成語を使った例文がそれぞれ3つずつあって、どれが一番正しい適切な表現、書き方かという問いに対しても、このことをしっかりと読み取ることができていない。今年度についても大変低い正答率であり、昨年度とよく似た状況とっております。

こういったことは、小学校算数、中学校数学の問題においても、問題をしっかりと読み取って、その意図を解釈する問題や、回答するときに算数・数学の問題ではありますが、説明を記述する問題が多くあり、これらの問題について、質問紙調査の中でも最後まであきらめずにやったかどうかという質問に対して50%の者が最後までやったと回答していますが、残りは途中で投げたという状態です。全く最初からする気がなかったというのが1割ほどです。その辺が大きな課題かと思っております。学力については小中ともA問題、B問題の両方において、県平均よりも相当低い正答率で、危機感を覚える状況です。

なお、国語に関しまして、例えば、読書が好きですかという問いに対して、大変高い率で「好き」という回答をしております。また、国語の読書の時間も、町内の図書館、図書室の利用状況を見ていると、かなり本は読んでいると思います。しかし、それがこの学力調査の結果に結びついていない。こういったところに原因があるのか、そういったことも調べていかななくてはと思っております。

ただ、質問紙調査を見ておりますと、例えば中学校でだけで言いますと、「国語が好き」は少ないですが、「大切である」、「将来、これは役に立つ」と感じているのが、それぞれ90%あるいは81%となっています。やっていかなければならないという気持ちは読み取れるのではないかと思います。数学についても、「好き」が55%ですが、「大切だと考えている」のは82.5%、「役に立つ」と考えているのは70%で、この辺をどうやる気を出させて学力につなげていくか、そういったことも考えていく必要があるのではないかと思います。同時に授業の仕方、自分の考えを伝えるように工夫して書くといったことを気にして学習しているかということに対しては、50%の者が気にして、あとはそういうことは気にしていない、または、全く気にしていないということで、この結果がそのまま現れてきているのではないかと思います。また、考えるとか調べることに對しても、総合的な学習の時間における調べ活動や発

表活動をしたかということに対して、41.2%がそういうことをした。総合的な学習本来の学習のあり方である「調べて考えて発表する」といったことが普段できていないと考えています。

めあての提示や、振り返り活動についても、44%が授業の中でめあての提示があった、あるいは、53.5%が振り返り活動があったと、生徒は捉えています。この辺は学校質問紙のほうでは、どのように授業をやっているかといったところとすり合わせ、あるいは、もう少し突っ込んだ授業のあり方についても考えていく必要があるのではないかと感じました。

(大森会長)

あと、よろしいですか。まだほかに伝えたいことがありますか。

(西委員)

あと、少し気になるのが「生きる力を育てる」、あるいは「確かな学力を」という点で、家庭での学習時間が少ない。これについては、テレビの視聴、ゲームあるいはスマホをやっている時間が大変長い等、いろいろなマイナス要因があります。一方で、例えば、「人の気持ちがわかる人間になりたいと思いますか」への肯定的回答が91%、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」への肯定的回答が93.9%と、大変高い数値を示していますので、この辺をどう伸ばしていくか。心配なのは「自分に良いところがあるか」への否定的回答が44%、それから「自分の意見や考えを発表する」ことをしたことがないという否定的回答が58%となっていることです。大変漠然と、社会人として良い人、良い人間になりたいという気持ちは持っているとはれませんが、具体的に不安材料がたくさんあるところが心配で、この辺については、学校教育においてどう改善していくかについて、もう少し検討を深めていく必要があります。

以上です。

(大森会長)

何かお聞きになりたいことがありましたら、質問、ご意見等お願いします。

(榎本委員)

ご説明ありがとうございます。この学力の点で少しお伺いしたいのですが、各市町とも平均正答率が大変低いということで、この紀南地域は学力が低いという現状認識を持ちました。平成26年度も新聞報道で熊野市の結果が発表されていましたが、紀宝町は議会の常任委員会等でも発表されたと思いますが、三重県平均、全国平均を下回るような結果となって、一保護者としても大変危機感を覚えています。

そこで、私なりに家庭でできることということで、先進地の秋田県、福井県の状況を参考に、家庭でできる取組等を少し研究しました。4つございます。まず、1つが、三世代の同居が多い。そして、2つ目に「早寝・早起き・朝ご飯」、これは基本的なことですが、これが徹底されている。そして、3つ目に、テレビ、インターネット、ゲーム、これは各市町の調査票を見ても大変時間が多いということも分かりました。これが先進地では少ないという状況です。そして、4つ目に、睡眠時間が非常に長いです。この4点が先進地の秋田県や福井県で共通している事柄でした。

ここまで学力が低いと、今後、保護者と先生が一緒になって家庭でもやっていかなければならない時期が来たのではないかと、保護者としても危機感を覚えています。

そこで、特に先ほど読書の時間が多い割には、国語Bの正答率が低いという話もございましたので、その辺が生かされていないのではないかと。これは平成26年度でも若干そういう傾向が続いておりました。

この場でお伺いしたいのですが、こういう紀南地域の正答率が低い現状を受けてどのように考えているのか、小学校の先生方にお伺いしたいと思っています。

(山本委員)

どのようにということですが、学校の中でもこのことについての研修はしています。その中でなぜこの部分が低いのかということについて、私どもの学校では国語力を付けていかなければならないという話になっています。問題を読み取る力、自分の思いを書く力、今までの国語の授業とはある意味違う部分の力というか、そういう力も付けていかなければいけないというのは、職員の中でも当然話が出ています。

ただ、具体的にこうしていきましようとかいうところは、今まだ話の途中段階ですので、細かくは言えませんが、自分たちの今までしてきたものがすべて悪かったとは思ってないところもあります。というのは、全国学力・学習状況調査ではかれる力も、もちろん学力の一つだと自分たちも考えています。だから、低かったということに対しては、付けていかなければならないとは思っています。その部分の付ける力をどうしていくかという話ですので、その部分をどうしていくかという校内研修での話はあります。

もう一つ、自己肯定感を付けていかなければいけないという話もよく出ています。先ほど、人の役に立ちたい、人の気持ちがわかる人間になりたいという気持ちは、子どもたちを見ていると本当に感じますが、自分に対して自信が持てない子どもたくさんいます。そういう子に対してどのように力を付けていくかという話もしています。

(寺本委員)

中学校でもこの結果を踏まえて、学力をどのように付けていくかということは、すごく考えているところです。学校の中でもこのことはよく話題に出ています。

中学校の立場で言わせてもらいますと、自分は数学を担当させてもらっていますが、最終的な目標として高校入試を意識して、それに向けて点数が取れることを授業の中で考えているところです。

この学力調査は、国語と数学の調査だと思いますが、この国語と数学の調査問題と県立高校の検査問題との間に、自分の中で違和感があるところです。しかし、そう言っているわけにもいきませんので、この学力調査での必要な学力というのも、学校の中で求められているなら、それを今後付けていかなければいけないとは思っています。

この結果を見せてもらおうと、子どもたちに「聞く力」が付いていないと考えます。話を聞いてそれを発信する力、これは国語、数学だけではなく、どの教科でも要るのではないかということで、すべての教科の中でそのようなことを意識して授業の中で取り入れていこうという話をしているところです。

(大前委員)

例えば、小学校も中学校もそうですが、B問題には3つの条件で作文を読む、書くというところがあります。3つ目の条件は、字数の規定で、何字以上何字以内という規定です。それが満たされていないと、前の2つが踏まえられていても×になります。

ふだんの自分たちのテストの中では、字数制限を付けていても、それは減点対象にするぐらいで部分点を与えますが、全国学力・学習状況調査の中ではそれが×になります。そういうことまでしている。ふだんのテスト問題との答え方の違いもテクニックの一つとして身に付けていかなければならないかと思えます。

先日、熊野市の全国学力・学習状況調査の研修会がありました。特に小学校の問題では無解答のパーセンテージが非常に高いという報告がされました。一生懸命考えて最後まで問題を解ききる。一つの問題に詰まったら、次の問題をやろうというところも教えていかなければならないかと思っています。

(辻本委員)

正直言って危機感を感じています。次年度に向けてどういう形で改善を進めていくかについても、先ほど山本委員からもありましたように、とにかく今、その辺の検討を進めていく。特に先ほど榎本委員がおっしゃったように、家庭との連携の部分では、今まであまりできていなかったところがある。特にこの結果から見れば、例えば、テレビの視聴時間あるいはゲームの時間が非常に長い。必然的に家庭学習の時間が短くなってしまおうというのは当然の結果で、その辺りでいえば、宿題のあり方をどうしていくかとか、あるいは家庭学習への協力を得るための啓発活動をどうしていくかについては、PTAの皆様ともしっかり考えていかなければならないと考えています。

特に、めあての提示と振り返り活動の徹底については、去年の全国学力・学習状況調査の結果から見ても、このめあての提示と振り返り活動をきちんと授業の中で進めていくことによって、例えば、国語Bの成績との関連性は、中学校においてすごくあったという話もありましたので、そういう授業の進め方についても、各学校で改善して進めていく必要があると考えています。そういうことで、おそらく各学校での状況も含めて今後改善していくことを、どの市町の学校においてもそれぞれの保護者に対してきちんと提示をしていく予定という話も聞いております。先ほど言いましたように保護者との連携を重点に置いて、今後につながる学力向上の取組を今後すべき必要があると強く感じております。

(大森会長)

ありがとうございます。私も今年、自分の子どもが小学校6年生でこの調査を受けました。どうだったかという話をしたら、B問題のほうはイメージできるかどうかという問題もあるらしく、よく言われる「遊びの効果」といいますか、日常生活とか何気ない子どもにとっては無駄かもしれないような、穴を掘っていると土をいじっていると、そういうことも必要だなと思いました。三重大大学の森脇先生がそういうことをよく言われますが、それもあるのかなと思ったところです。また、先ほど榎本委員が言われたように保護者と連携してということで、私も学童保育に子どもが行ってしまして、先週の日曜日、保護者が家庭で子どもの勉強をみてやらないと学力調査の結果が低い傾向があるということだったけれども、うちは両親ともに働いているので、今以上に家庭学習を増やせと言われてもみてやれない。これ以上、宿題を見ろとか言われても無理だという話もありました。

津市の場合は、地域の方が学校にいろいろな勉強のサポートやアシスタントとして、家庭科の授業でも入っています。この3年間お話を聞いていて、紀南高校でまさにやっ

ていらっしやるコミュニティ・スクールのような、地域住民の方が教育サポートやアシスタントで入るということは、紀南地域の小中学校ではあまりやられていないかと思っています。いろんな授業、例えば英語の授業では地元の方でも英語の勉強をされている方がサポートに入り、子ども1人あたりにかかわる指導者の人数を増やすことも可能なのではないかと思います。

この問題は、最初にも言いましたが、学力調査等ではかれる「学力」というよりも、「生きる力」の中の一つの「学力」がどうかというレベルで見ていくほうがいいと思います。あまり学力、学力と言われても、私たち大学教員として大学生を見てきたときに、学力があっても、それ以外の生きる力と言われるようなコミュニケーション能力とか、耐久力やスタミナ、そういうところが欠けていたらどうしようもないわけです。ここでの話として、私自身は確かに家庭学習というのは、榎本委員が言われるように大事だと思います。もう一つ、私が付け加えて聞かせてもらっていたのは、秋田県にしても福井県にしても三世代家庭が多いということでしたが、この紀南地域では少ないですか。三世代家庭は少なくなったのなら、地域のおじいちゃんおばあちゃんたちにもっと学校に入ってもらふ必要があるのかなということ、聞いていてすごく感じました。

ここまで何かご意見はございますか。

(榎山委員)

今、会長が触れられたことで、辻本委員や榎本委員からも家庭と学校との連携と云ってくれましたが、この状況を見ていて本当に学校だけに何とかしろという時代は終わったと思います。テレビの視聴時間もテレビゲームの時間を減らして、家で勉強する時間を増やしてほしいという学校への要望の仕方は、もうだめなのだろうと思います。この3市町の結果を見ていて思いました。家庭として、PTAとして本当に何ができるのか。長野県のほうでしたか、スマホを使うのは何時以降だめだとかというようなガイドラインのようなものを教育委員会が出したと聞いたこともあります。PTAとして家庭ではこうしていくから、学校ではこういう形で取り組んでほしいというような提示の仕方をしていかないと、結果が出て低かったから学校の責任と言っているだけでは向上は見込まれないと、この結果を見ていて思いました。

(大森会長)

私も「地域全体で子どもを育てていく」ことを考えないといけないと感じています。

あと、何かございますか。

(榎本委員)

本当に家庭との連携でやっていきたいと考えています。そのためにも、各学校のPTAとか、私たちが出ているPTA連合会をもう少し機能させるとともに、この問題に対しては、学校から情報を提供したり開示したりしていかないと本当に進んでいかない問題であると思います。

そして、一保護者としては、家庭での学習時間を増やすために一つお願いですが、学校ではどうしたら家庭学習ができるかというコツを少し補足していただいたり、勉強の楽しさをアドバイスしていただいたりしてもらいたいという希望があります。学校のせいにするのではなく、そういう家庭学習のコツを教えていただけたらいいのか

なというのが正直な思いです。それだけ付け加えてお願いします。

(野地本委員)

当たり前のことですが、今、保護者のほうがテレビを視聴したり、ゲームをしていたりするということが結構増えてきています。保護者自身がテレビを見たりゲームをしたりしていて、子どもに勉強しろと言っても、できるわけがないと思います。まず、保護者が手本を見せること、言い方は悪いかもしれませんが、家で子どもがいるときは、できるだけテレビは見ずに読書をする、そういう姿を見せると子どもたちも自然に家庭学習をするようになってくると思います。保護者が何もしないでテレビばかり見ている、ゲームばかりしている、そういう状況で子どもにだけ勉強しろと言っても無理な話だと思います。そういうことは学校と保護者との連携をうまくやって、家庭のほうから変えていかないといけないと思います。

(廣畑委員)

今、小中学校の教育の話に重点が置かれていると思いますが、学力の低下というのは何年も前から私たちの紀南高等学校の中で問題になっています。基礎学力の定着の部分で校長先生に無理をお願いして、いろんな形で取り組みながら、高等学校で小中学校の学習内容の学び直しをやってもらっています。

現実問題として一晩寝たら学力は突然上がるものではありません。小・中・高等学校というこの地域にある教育環境を多いに活用するのなら、小・中・高連携をもっと教育の部分において進めていただきたいと思います。例えば、基礎学力の定着と向上に向けた取組を紀南高校ではやっていただいています。高等学校の先生は小中学校の学習内容を教えるノウハウを持ってない、高等学校の授業を教えるという部分以外の勉強をしてないので、そこら辺をもっともっと充実させていただいて、目の前の子どもたちを社会に出て強く生きていける子どもたちに育ててほしいと思っています。中学校の先生方が、授業が終わってから高等学校へ来て指導していただけたら、とてもうれしいという希望があります。

(大森会長)

次は、木本・紀南両高校から小・中・高連携の取組の進捗状況と、今後、予定されている取組につきまして、説明をお願いします。

進行の都合上、5分ぐらいでよろしくをお願いします。

(谷合委員)

これは1回目の資料説明のある意味、繰り返しという理解でよろしいのでしょうか。

(大森会長)

その中で、先ほど廣畑委員が言われたような小・中・高連携、中・高連携、あるいは小・高連携のようなものがあれば、そのことをお話いただきたいと思います。

(谷合委員)

そうしましたら、繰り返しになる部分と、この1学期に実際、実践している部分でお話します。資料としては29ページを見ていただいたと思います。

連携の部分でいくと、予定では尾鷲高校と木本高校がスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールという県の事業指定を受けており、今年で3年目に入っています。英語科の教員の指導力向上、当然生徒たちの学力向上がメインになりますが、

その関連で英語科の教員が授業公開をやっております。中学校の先生方にも呼びかけていく中で授業を見ていただいて、意見交換をやっております。人数的には当然少ないでしょうが、これは地道な取組という部分での連携の一つの例になるかと思っております。

中学校や高校でも初任者、教員1年目の方が一定数、毎年みえますが、ここら辺もお互いに高校側が中学校に伺ってとか、中学校側が高校に来ていただいてということで、直接生徒に教えることとは外れてくるかもしれませんが、お互いの実情を生で感じ合うというところも、回数的には多くはないですが、日常的にさせていただいております。

これは予定になりますが、今年、本校に入学した1年生の総合学科の生徒が、来年2年生になったときに、半日のインターンシップを計画しております。紀南高校ほどの立派な取組はなかなかできない事情がありますが、7月から夏休みにかけて、私も受入れ先の開拓に回らせていただきました。係の者も回りました。そういう中で、現段階ですが、小学校にも受入れの了解を得ているところがあります。ここら辺は高校生が小学校に半日行かせていただく中で、高校生をどのように活用していただくかという部分は、小学校でご相談いただくようなところがありますが、あくまでも計画段階ではありますが、ここら辺も一つの連携の取組になっていくかと思っております。

あとは、1学期に取り組んだ高校間の連携ということでは、尾鷲高校と木本高校の大学進学を目指している生徒を集めて、名古屋のほうから塾の講師の方に来ていただいて、90分間でしたが、合同で講義を受けるという活動も7月末に行いました。両校合わせて120人の生徒が受講しました。これは小中との連携ではないにしても、地域の一定意識のある子どもたちを更に引き上げる一つの刺激が与えられればいいということで、今年初めての取組としてさせていただきました。

あとは同じようなことで、これも尾鷲高校との合同で、公務員を目指している生徒にセミナーの機会を設けました。夏休みの段階では尾鷲高校の講習にこちらから行かせていただきました。2学期の末には、お互いの行事予定が合いませんので、木本高校独自で名古屋から講師の方に来ていただき、公務員セミナーをまたやりたいと思っています。公務員希望者が、4月初めの段階の調査では木本高校の中では、それほど固い決心でない生徒も含めると、3学年合わせて25人ぐらいいます。今回、全学年に呼びかけて尾鷲高校のほうに参加させてもらったのは、実際には5人でした。そのうちの4人は3年生で、1人は1年生。尾鷲高校も10人に満たない数でしたが、講師に来ていただいて、4日間みっちりいろんな問題練習やノウハウを教えてくださいました。生徒たちの評判はすこぶる良かったです。

今、29ページの資料と自分の手持ちの資料等の2種類を見ながら話していますので、29ページで飛んでしまっているところがあるかもしれません。もしあればご質問いただければと思います。

最後に、学力の部分でいろいろ捉え方があると思いますが、別の件もあって、小中校との部活動面での連携で今回自分なりにまとめました。そうしましたら、この地域は高等学校にあたるものは、今は2校ですが、元々3校しかありませんでした。ですので、小学生や特に中学生にとって高校の存在は、気がついたら高校があって、どち

らかに行くという流れの中で、結果的に随分以前から、例えばラグビーに代表されるような結果的に連携になっているところが結構たくさんあるということを、自分なりにまとめて非常に強く感じました。

私の思いとしては、勉強も大事だし、部活動も大事だし、両方がうまく回って行って先ほどの自己肯定感などの向上につながっていけばいいと思います。そういう視点でここも書き込む中では反映していきたいと思っています。

抜けている点があったらご質問いただければと思っております。

(堀川委員)

本校、現在も近隣の小学校、中学校といろいろな連携、取組をさせていただいていますが、学力の向上については、現行の取組をまずはベースに、創意と工夫を重ねて実効性を高めていくということを考えております。

まず、1つとして31ページの最後の4行の部分です。一つは、阿田和小、阿田和中と本校の3校連携による小中高キャリア教育合同実践事業です。

2つ目が、授業公開もしくは研究授業における中高教員の相互乗り入れです。本校の授業公開は、年2回、5月下旬と11月です。これには管内の中学校の先生方、学校運営協議会の委員、三重県の県立学校の教員に案内を出しております。逆に、近隣中学校からは授業公開、もしくは研究授業の案内をいただいております。これは裾野が広がっているように思います。この2つが軸になると考えております。

学力の向上ということについては、本校の生徒は今も昔もほぼ100%が地元出身の生徒です。地域で生まれ地域で育ち、地域の明日を担う子どもの生きる力を小学校入学から高校卒業までの12年間のスパンでどう育てていくかということに尽きると思います。この基礎的・基本的な学力を生きる力の一つとして捉えて、クローズアップしていくことを地域全体の課題として捉えることが必要であろうと思います。

そこで、現状や課題について、まずは共通理解や共通認識を図り、成果につながるようなデータがあれば、リサーチするということ。例えば、掛け算の九九ができないから小学校の責任にするのではなく、また、アルファベットの読み書きができないということで中学校の責任にするということでもなく、それぞれにつまずきの原因や効果的な指導方法などについて相互に知恵を出し合うという機運を高めていくことが必要だろうと考えます。小・中・高の風通しを良くしていくことが大切だと思います。私たちも含めて、小・中・高が互いの様子を本当はよく分かっていないと思います。学力についても入学者選抜の前期選抜の国語、後期選抜の5教科の得点だけでなく、生徒一人ひとりにとって、小学校入学から高校卒業までの12年間はつながっているという見方が大事だろうと思います。

責任の所在を追求することに終始するのではなく、まず、新たな気づきを得ることを大切したいと考えています。過去には数学の教材を中高合同で研究開発した取組もあったことも聞いております。

また、授業公開、研究授業も授業実践力向上に向けた直接的な取組です。特に高等学校では、小中学校からの積み上げの教科目、国語や算数・数学の研究協議で研修の機会を持ったり、ときには有効であれば外部から講師をお招きしたりすることも大事かと思っております。とかく授業公開、研究授業というと、見て終わりという参加にとどまっ

てしまうことが多いですが、何か持って帰ることができるような付加価値を高めるための工夫が大事かと思えます。

中・高は校種としてつながっておりますので、よく連携が言われますが、場合によっては高等学校と小学校との連携も視野に入れなければならないということです。今のお話は3教科、5教科ベースの話だと思えますが、ほかにも本校は阿田和小、阿田和中と合同で行っている秋の合同奉仕作業ですとか、本校教員による陸上競技をはじめとするスポーツ指導もあります。インターンシップの成果発表では隣の阿田和中に本校の生徒が出向き、福祉の交流事業では福祉関連の教科目を履修している生徒が阿田和小に出向き活動する取組もあります。英語の授業で本校の教員が阿田和小に出向く、そして、音楽の実技指導ということで近隣の小学校からもお呼びいただくこともあります。こういったことも子どもたちに生きる力を育むことに結びつく小・中・高連携であるので、裾野を広げ、また、より有効な手法等も視野に入れながら、より一層推進していきたいと考えております。

(大森会長)

堀川委員、紀南高校は地域連携型の中高一貫学校ではないですよ。コミュニティ・スクールですよ。聞いていると、地域連携型の中高一貫学校の指定を受けているようなイメージを持ちましたが、中学校の先生と高校の先生の連携を取らないといけないと思いがどこにあるのですか。

(堀川委員)

やはり教育に対する熱き思い、それから、子どもたちは12年間を地元で育つわけですから、それぞれ地域全体で見ようということが大事だと思います。

(新谷委員)

今、校長である堀川委員から話がありましたが補足させていただくと、紀南高校、阿田和小学校、阿田和中学校の3校がキャリア教育という形で県からの指定を受けていました。その前はもう少し何校かありましたが、最初は県への報告のための実践みたいな形で小・中・高等学校が連携して取り組んでいました。しかし、去年から県の指定がなくなりましたが、歩いてわずか5分の距離にある3校の連携をずっと続けられないだろうかということで、田岡委員は本日欠席されていますが、御浜町教育委員会に窓口になっていただいて、授業をお互いに公開して見合う機会を持ちながら意見交換をしようという形で去年ぐらいから進み出しました。それが今、小・中・高連携という一つの理想の形をつくっているかと思っています。これがもう少し進んでいくと、今の学力の問題やいろいろなことについて、小・中・高の先生たちがもっとフラクに話し合うことができるのではないかと、今、皆様に提起させていただきました。

(大森会長)

私も飯南高校の学校関係者評価委員長をしていますが、先週、報告を受けた内容と一緒にだと思いながら聞いていました。そういう連携で先生たちがお互いに教育力、意見交換をすることで変わるというのがよく分かります。

私も飯南高校等の高校で教えさせていただくことで、大学での授業との違いが分かる機会となっています。そういう意味ではここで言われたような連携というか意見交換、ざっくばらんに話し合うのが一番地域の教育力の向上になるかと思っています。

地域の人にも議論の中に入って、どんな子どもを育てるかというのを昨日お話ししました。

何か今までのところでご意見・ご質問があるでしょうか。

学力というと、どうしても学力調査のことが気になって、その中での連携ということでしたが、学校だけとか保護者だけとか、学校と保護者だけでは追いつかなくなってきているように思っています。私自身も保護者として他の保護者と話していると、共働きの家庭では子どもの家庭学習をあまり見る時間がなく、本当に地域の人に助けてもらわなければいけないし、学校の先生に助けてもらわなければいけないということが多くあります。そういう意味で、ここの場所が紀南地域高等学校活性化推進協議会ですので、そこでもう少し伺いたいと思いますが、大久保副会長から何かありますか。

(大久保副会長)

私たちの子どもの頃を考えると、同じことをしているようでも、子どもも、保護者も、先生も、子どもは自覚がないかもしれませんが、後で大変な思いをすることになるのではないかと、今感じています。私たちは今考えて、今自覚できる大人ですが、子どもは自覚がなかなか持てないと思います。家庭内で進路のことなどを話していると、妻から子どもはそんなことまで今は思いつないと言われます。そのときはっと気づくことがあります。学校の勉強だったり、友達のことだったり、子どもにも今いろいろ考えないといけないことがたくさんありますが、子どもというのは先を考えたり自覚したりするのが難しいと感じます。

また、今までのいろいろなお話を聞かせていただいて、いろんな取組を考えてしていただいているのはありがたいと思いますが、こういう場やいろんな場で大人がもっと考えなければいけないなと感じました。

(榎本委員)

1点だけ確認させていただきたいのですが、前期選抜と後期選抜のことです。この地域は2校しかない中で、今年度は定員が割れてしまう状況です。前期選抜で合格した子どもたちは、中学校でもなかなか授業に集中できないとか、実施日がかなり遅くなったので昔よりはよくなったかとは思いますが、こういった状況下で、この地域にそぐわない制度ではないかという保護者としての思いもあります。校長先生方は前期選抜と後期選抜という制度は、この先も必要と考えられているのかどうか、和歌山県は地域にそぐわないということから3年で廃止したこともあるので、その辺の考えを聞かせていただけたらと思います。

(堀川委員)

前期選抜、後期選抜という制度が有効なのか、そうでないのか。これは私自身が一概に申し上げることはできないと考えます。一長一短がありますので。高校側としては前期選抜で少しでも早く入学者を確保したいという思いもありますし、前期選抜と後期選抜では内容が違うので、より多面的な方法で生徒を受け入れることができるという思いもあります。

ただ、2回も入学者選抜をするのはどうなのかという思いはあります。選抜に係る準備等、これは高校も大変ですが、中学校はもっと大変だと思います。この制度については考える時期に来ているかと思っています。

(谷合委員)

堀川委員が随分上手に言っていただきましたが、私も同じ気持ちです。

先ほどからの話をぼかしてしまいましたが、すごく気になっていて、なおかつ、私自身もずっと以前から自分自身の課題として考えていることがあります。それは、先ほども全国学力・学習状況調査に絡んで入試に向けての勉強をさせなければいけないという話もありましたが、同じようなことが、高校においても3年生で進路が決まってきたときにあります。例えば、この連休が明けると就職活動が解禁になり、就職が決まってくる生徒が出てきます。その後、その生徒たちのモチベーションをどう維持するかという課題です。入試についてもいろんな段階で進学先が決まってきます。結局、高校入試であるとか大学入試であるとか、広く言えば進学先、就職先が決まった後、その生徒たちがどう過ごしていくかという部分が課題であると言えます。我々大人が見ていて、もう少し何とかならないかと常々思いますが、現実的にはなかなか効果的な方法が見つからなくて、自分なりに工夫しながらやってはいますが、なかなか効果が出ないという状況です。

段々話がまとまらなくなりますが、私たちの若かった時代は、このように生きていけば大体こうなるだろうというモデルがはっきり見えていました。ところが、今の時代は逆です。将来が全然読めないです。そういう意味では、こういう時代に若い子たちにどう目的意識を持たせ、意識付けをして、目標に向かって取り組ませていくのかというのは、それほど簡単なことではないと思います。

堀川委員が言われた受検の機会が2回あることに関して、いろいろな見方によって課題もあるでしょうが、一方では、今、私が言わせてもらったような部分を生徒たちにも伝えていければ、入試はクリアさせる一つのハードルでしかないと言えます。就職先が決まったり大学が決まったりするのは、一つのハードルでしかない。そういう生徒たちを何とか育てていけないかという夢みtainなことは、いつも思っています。入試の話からずれているかもしれませんが、つながる部分もあると思います。

(事務局：宮路教育改革推進監)

今の前後期選抜になりましたのは平成20年からです。それ以前はご承知のとおり、推薦入試とか特色化選抜ということで実施していました。

これを変えるときに様々な立場の方に入っていただき協議しました。今の制度に改めたのは、一つは子どもたちの主体性なども含めて活かせる仕組みにしなければならぬということでした。また、学校で推薦入試とか特色化選抜といういろいろな制度、割合での受入れがありましたので、どこの学校もある程度分かりやすくそろえないといけないということで、簡素化ということがテーマの一つとしてありました。

もう一つが、受検機会を複数にすることです。その当時の議論においては、中学生が受検するにあたって複数の機会が必要だろうという意見が強かったです。そこで、できるだけ多くの学校をとということで、それまで専門学科が中心であった推薦入試から、前期選抜・後期選抜の制度にして幅を広げたという経緯があります。

ただ、今、いろいろなところから、入試を一回にしたらどうかとか、やり方を変えたらどうかといった意見があることも聞いております。これは、入試制度ですので仮に来年からとパッと変えてというものでもありません。特に先ほど堀川委員も言われ

ましたように、子どもたちにとって本当に何がいいのか、地域ごとに状況も違うと思います。それらを含めながら時間をかけていろいろな意見を聞きつつ考えていく必要があります。今はまだ検証段階といえますか、見ている段階です。制度ですので問題があれば変えなければいけません、今いろいろな意見がある中で、例えばすべてやめておきなさいとか、これはまずいということではありません。学校によって多少、変えられるところはありますが、今後の議論の中で新しい学校像に向けてこういうことの議論もあっていいかと考えられます。

全体としては、子どもたちにとって何がいいのかということが一番に考える必要がありますので、我々がこうだろうというのは、私も正直はっきり言えません。いろいろなところで検証しながら見ていく必要があるということです。

(榎本委員)

いろいろな意見がありますので補足しますと、前期選抜で落ちてしまったというのは、人生でのつまずきとなり、1ヵ月後に後期選抜を控え、なかなか立ち上がれない。そのような挫折を味わってしまうという声も聞きます。また、はっきり言えない部分もありますが、合格の基準がはっきりしないという話、曖昧さというのも保護者から多数声が寄せられています。北勢等の他地域ならば、いくつもある高校の中からの選択として、前期選抜・後期選抜は可能かと思いますが、近大高専が移転し、この地域の高校が2校しかない中でのご意見の一つとして少し尋ねさせていただきました。

(大森会長)

今まで話してきたのは、今の2校の中で、この地域での教育を通じていかに地域の活性化を進めるかというお話です。ですので、先ほどの堀川委員からの説明については、教育者として私もびっくりしましたが、本当に連携がかなり進んでいるので、きっといい高校が出てくるだろうと感じています。

飯南高校を見ましても、十数年経ちますが、徐々に変わってきて、学力についても上がってきています。基礎学力と言われますが、子どもたちを見ていると、生きる力という意味では、進学校の高校生に比べても、非常に高いものを発揮してきますので、そういうのをぜひ進めていただきたいと思います。

とは言いましても、前回の確認でもありましたように、近い将来、人口減はあるということで、将来的な統合に向けた方向性という部分も、ある程度議論しないといけなだろうというのは、前回合意させていただきました。それに基づきまして、前回からの宿題となりましたが、皆様に、将来的に新たな学校を設置する場合の「育てたい子ども像」と「期待する学校像」について、今回、協議させていただきたいということをお話しました。18ページ以降の資料9をご覧くださいながら、各委員に5分程度でご説明いただきたいと思います。18ページの最初に野地本委員のお名前がありますので、野地本委員から順にお願いします。

(2) 木将来的に新たな学校を設置する場合の「育てたい地域の子ども像」及び「期待する学校像」について【資料9】

(野地本委員)

私の会社の社員の中には、小学生、中学生、高校生の子どもの持っている社員が結

構おります。そういう社員といろいろ話をしました。これから学校が一つになったらどうなるのだろうという話から始まって、こういう「育てたい地域の子ども像」にみんなの意見が固まってきました。人間としての成長や実行力や持続性を持った人。何事にもチャンスがあれば挑戦できる。それと、最近、わがままと個性というのが混同されていて、その辺をはっきり認識させられるのか。学校に対しても、そういうことへの指導をしっかりとやってもらいたいということです。

また、今日、来るときに友達に会いました。その人に今日はこういう会議があるので行くという話をしたところ、その人が言っていたのは、今、後継者不足でこの地域は悩んでいるということ。そして、耕作放棄地、作りたいけれど後継者がいなくて荒れ野原になっているということ。山も手入れができないということ。そういうこともあるので、遅きに失した面もあるかもしれませんが、例えば紀南高校に農業や林業などの専門の学科を設けてもらって、この高校を卒業すれば、すぐにそういう職に就ける。卒業したら一人前のプロとしてやっていける。そういうことをやっていったらよかったのではないかと。

それから、今、英語検定やワープロ検定等いろいろな検定がありますが、そういう資格取得。一般的な資格ではなく、すぐ就職に役立つ、特にこの地域で役立つような資格が何かあるのなら、そういうことに取り組めたらいいと思うということです。例えば、トラクター等に資格が要るなら、この地域でそういう資格を取れるようなところをつくっていく。そういうことをできるだけ早くやるべきではなかったかと言われて、なるほどと感心しました。まだまだやっていけるような気がしますので、やれなかったらやれなかったで、そのときは仕方ないですが、とりあえずそういう感じで進めていったらどうかと私は思います。

(尾崎委員)

「育てたい地域の子ども像」というところで、学ぶ姿勢を持った人、先ほど皆様の中からも聞こえてきた声にも関係しますが、学校教育を終えて社会に出ても、そこで学ぶことが必要になってきますので、学んでいこうとする姿勢を持った人になってもらいたいと思います。

自分が育った環境は、人、場所、地域など、今現在いる環境に感謝と愛着を持てる人。人というのは家族やお世話になった人ということです。場所は家、家庭、学校、地域、もっと広く言うと国まで含めてです。境遇というのは、いろいろな境遇、幸せいっぱいな境遇にない人もたくさんいると思います。しかし、それを受け入れていくという意味で、いろいろな困難な状況をすべて自分の背負っていくものとして受け入れ、受け止めていける人。ほかに、勇気を持てる人、自分が得たものを他の方に活かそうとする人、調和の取れた人、創意工夫できる人、思いやりのある人、人の成功を喜べ失敗を責めない人、素直な人です。

「期待する学校像」のところは、具体的にというのがどうしても分かりにくかったのですが、今、いろいろな事件や災害時の対応を見ていると、倫理や道徳心がしっかり育っていれば間違った方向には行かないのではないかとよく思いますので、そこを基本に据えて学力なり人間関係なりを培っていけるような学校が必要だと思います。

先ほどからの小中学校の学力についてですが、私が自分の子どもで体験したことを

お伝えしたいと思います。子どもが小学校のときに授業参観に行き、良い例と悪い例を感じました。まず、悪い例としては、先生と一番前の児童2人だけで進める授業を味わったことがあって、本当に全然楽しくなくて、もしかして普段からこんな授業をされているのならどうしたものかと危機感を持ったことがあります。良い例としては、まず、これについてどう思うかということは何人かの児童が意見を述べます。その後、「A君の意見に賛成の人」、「B君の意見に近いと思う人」といった具合に先生が尋ね、全員が何らかの意思表示をします。そして、いろいろと議論していく中で、「さっきはA君の意見に賛成と言ったけども、意見変更をしたい人」と再度尋ねていく進め方を初めて見せていただきました。これだったら勇気を持って手を挙げられる子どもだけでなく、なかなか自分の意見を発表することができない子どもも意思表示ができる。これを言って間違っていたら嫌だなと思っても、意見を変えるチャンスがある。このような授業をしていくことによって、自己表現や自分の意見を言う機会を与えられることにつながっていくのだろうと思い、参観している保護者のほうが次の授業を聞きたいと思ったような経験をしたことがあります。

自己肯定感についても、子どもが中学生のときですが、うちの子どもの良いところを学級の全員から1行ずつ書いてもらったものを持ち帰ってきました。学級の一人ひとりにそういうことをされているのだと思いますが、それを持って帰ってきたときに、こういうように見てくれている人たちがいるということ、保護者としてもうれしかったですし、本人も自分が気づかない部分でも、こういうことを感じてくれている人がいると感じたと思います。そういうことで自己肯定感が養われていくというか、自己肯定感自分一人だけでは感じにくいと思うので、周りからの働きかけや声かけが重要かと思います。

(杉松委員)

教育委員会として意見をまとめたという形ではなく、思いつくまま私の個人的な考えで掲げました。「育てたい地域の子どもの像」としましては、規範意識を持ってもらいたい。それから、知・徳・体のバランスの取れた子どもであってほしい。挨拶ができる子ども、いわゆるコミュニケーション能力です。ある本で読みましたが、「会社が一番望んでいるのは、少々能力が落ちても、挨拶ができてきちんとコミュニケーション能力のある人間がほしい」ということが述べられていました。それから、将来に夢や希望を持つ子どもということです。先日、ある雑誌を読んでいましたら、「夢を持って、希望を持って、夢を持たぬ人生は動物的には生きていても、人間的には死んでいる人生だ」というようなことが書いてありました。将来の夢や希望を持って臨んでもらいたい。そういったことをもとに「期待する学校像」としては、一々読みませんが、ここに掲げてあるような高校であってほしいと思います。

(大森会長)

田岡委員は欠席ですので、ここに書かれていることをお読みください。

(西委員)

私も立場上、憲法、教育基本法の理念に基づいて、日々は学習指導要領に基づいた教育を推進していく。そういう立場にあるので、ここに書かせてもらったことは、ごく基本的なことで、普遍的なものでもあろうと思います。

最近、特に感じるのは、子ども自身はいろいろな姿を見せており、今回の全国学力・学習状況調査の質問紙調査からも読み取れますが、きちんと育てれば育つ、本当にいい素質を持っていることは、昔も今も変わりはないと思います。社会人となったときに職務上の必要な事項について学ぶ意欲、よりよい生活を築いていく意欲、生涯学び続けていく姿勢を持った子どもというか、これらの基本的なところをしっかりと育てる。上手に育てる。これは直接的な指導で身に付くというものではないので、大人の知恵、保護者の知恵、地域の知恵で育てていく必要があるのではないかと思います。

「期待する学校像」と言いますか、こういった子ども像を実現するための施設、設備等の環境整備も大事ですが、当然、多面的な部活動や学習活動なども含めていろいろな面で、子どもの成長を最重要課題とし、日々課題に対応し続ける学校という組織が大事ではないか。もちろん教員も含めてですが、そのようなことを考えます。

(大久保副会長)

ここに書かれているとおりでありますが、大きなことでもありますし、保護者の中でこのことについて、また、この協議会があることについて、まだそこまで関心が寄せられてないという現状もあるということを感じましたので。今回、夏休み中でもあり集約作業ができなかったのですが、次回、聴き取りの中身についても役員会でしっかり議論するとともに、保護者に聞き取りつつ、このことについて関心を持っていただけるよう進め、集約ができ次第報告したいと思います。

(大森会長)

ただ、時間に限りがありますので、11月の次回の協議会にはぜひとも出していただかないと進まなくなってしまうので、ご協力をお願いします。

(寺本委員)

木本高校のPTAでも、「育てたい地域の子ども像」ということについて意見を出していただきました。たくさん意見が出た中で、3つぐらい書かせていただきましたが、それ以外にも他の委員が書いているような意見も出ていました。

こらからの「期待する学校像」としては、生徒一人ひとりの自己実現がかなえられるよう、あらゆる手段を惜しむことなく行える学校ということです。それぞれいろいろな夢を持って高校に入学してきますので、それを学校だけに任せるわけではないですが、地域連携のもと、一人ひとりの生徒の夢をかなえられる学校にしていきたいと思います。

(樫山委員)

その前に先ほどの(1)のところで言いたかったことがありまして、今後の議論の進め方によると、第3回するときには進路実現の部分はないですよね。後の「その他」のところでは言わせていただきたいという予約をしたうえで進めさせていただきます。

「育てたい地域の子ども像」と「期待する学校像」ということについて、紀南高校PTA役員会で話し合いをさせていただきました。何も無しでは議論が進まないの、堀川委員が出されたものをもとに議論をしましたので、中身的には似通ったところがあることをご理解ください。その中で出てきた保護者の思いといったものを散りばめさせていただきます。

まず、みんなが思っていたのは、将来の夢をしっかりと描き、実現に向けて努力する

子どもでした。資料の3つ目の、自分の育った地域に愛情と誇りを持ってというところですが、保護者的としては将来的に地域に戻ってきてほしいのですが、戻って来られない実態が多々あるのも分かっていますので、そのような中でも、この地域、ふるさとの発展に何か寄与できる人間となるという思いを持って育ててほしいということも多くの方が思っておられました。この欄の最後のところですが、周りのすべての人と優しくコミュニケーションがとれる子に育ててほしいという思いもあります。

「期待する学校像」についてですが、今、紀南高校、木本高校が持っているもの、又は、2つが1つになったときにこういうことが実現できるのではないかとということも含めて書かせていただきました。

この欄の4つ目の、生徒のニーズに合った部活動についてですが、2校以外のところ、又は他県に行くのではなく、この地域から全国を目指せるような環境を、施設整備を含め、そういった土壌のある学校を期待します。そういった人材はいるのではないかと考えています。その次に書いています、いじめや差別がない安心して通える学校、立地場所も含めて防災体制の整った学校に通わせたいというのも本当の保護者の思いです。

また、先ほどと重なりますが、部活動等の活動時間が保障された、通学手段のある学校というところではあります。津や四日市のように近鉄をはじめいろんな交通網が発達している地域ではありませんので、そういった部分でも部活動の時間が保障された通学手段のある学校、立地場所も含めて、そういった条件が整った学校を望むということでした。

(久保委員)

重複する部分がたくさんありますので、特徴的な部分を見ていきますと、理事会で一応検討しましたが、あまり積極的な意見も出なかった中で、一つだけお話をさせていただきます。両高校の統合については、両校で7学級が維持できないときということがあって、今日も資料を出していただきましたが、中学校卒業生は、今の小学校5年生が前年よりも40人、小学校4年生が前年よりも43人減るといっていますが、小学校3年生では前年よりも33人増えて、その後はあまり変わらないという状況です。その中で7学級を維持していくには、この今の小学校4年生のところから、何とか1学級の定員40人ということに対して若干の地域的な配慮をしてもらったら存続できるのではないかと意見が出されました。これは私も意見としてぜひお伝えしたいということで、今日、報告をさせていただきます。

先ほど近大附属新宮高校の進路先の話なども出ていましたが、私、たまたま今は紀南病院に勤めておまして、医療職に関係する一例としてご報告させていただきます。毎年夏休みを利用して一日看護体験という取組を行っております。今年は8月6日に行いまして、計68人の参加を得ました。部門別では医師部門に19人、薬剤師部門が22人でした。その中で近大附属中学校・高校からの参加者が33人ということで、50%を占めておりました。ちなみに、昨年も47%でした。私たちは、先ほどから地域へ残るということを非常に気にしながらやっております。地域医療を守るという意味でも、私たちの願いとしては、地元の高校卒業後の進路選択を目前に控え

た方々にぜひとも参加していただきたいという熱い思いがあります。その中で木本高校4人、紀南高校0人という結果でしたので、どういうことなのかということもありません。一つの事例としてご報告させていただきます。

(廣畑委員)

まず、紀南高校の学校運営協議会で協議してこれを書いたわけではなく、私個人として書かせていただきました。

そして、「育てたい地域の子ども像」というのを、私は育った結果の人ということで書いてしまいました。書いている内容はそのとおりです。「期待する学校像」のところは、もし2校が1校になった場合というところで想像して書きました。

進路希望を実現できる教育に力を入れる学校という大きなくくりの中で、①として、進学から就職まで多様な教育プログラムを持って生徒に提供できる学校であってほしいと思います。それで、いくら学校がいい教育プログラムを持って提供できるとしても、生徒自身や保護者が一緒に将来の夢を描くことができなければならないと思いますので、学校と保護者と地域が連携しながら、また、地域の力も利用しながら生徒を育てていける学校になればいいと思って、②、③の内容を書きました。

④は、基礎学力がどうしても必要な生徒もいると思うので、ここは書いてあるとおりです。

⑤の安全な学校というのは、津波等の防災という部分だけではなく、生徒がその学校で安心して一日を過ごせるという部分も含んでいます。

⑥の通学に時間とお金がかからない学校。これは檜山委員も書いていましたが、部活動の時間も取れるようなという部分。ただ時間だけではなく、この地域は全国と比べて所得が低い家庭もありますので、なるべく通学にお金がかからずに済むという部分です。自転車で通えればいいという話です。そういう部分を含めて通学に時間とお金がかからない学校であってほしいと思います。もし、距離的な問題等々があれば、スクールバス等も考えていただければうれしいと個人的には思っています。

生徒を学校と保護者、地域が一体となってという⑦についてですが、私たちは生まれてからそこに学校があったので当たり前のように思っていますが、学校というものは、地域が長い年月をかけて勝ち取ってきた地域の財産だという部分を、私は紀南高校の同窓会において学びました。南牟婁郡に高校が必要だということで勝ち取ってきたと学びました。

名前は忘れましたが、県内に昔あった村の村長の話です。小さな村で先生方の給料を払うのが大変だということで、全国町村会を作るきっかけになったと聞いていますが、先生方の給料の国庫補助金として3分の2を勝ち取ってきた人が三重県の小さな村の村長であると。それで、大きくいって教育費という部分も大切に私たちは考えて勝ち取っていくという気持ちを含めて、地域が一体となって学校を大切にする地域であってほしいと願いを込めて⑦を書きました。

(大前委員)

まず、ここに書かせていただいたのは、熊野市の小学校長会での意見です。同じように南牟婁郡の小学校長会にも意見を要請しましたが、紙面の締切には間に合わなかったということで、それだけ付け加えさせてください。

(大森会長)

次回に出してもらうことはできますか。

(大前委員)

ほとんど同じような状況でした。違うような意見の部分もありましたが、基本としてはここに書かれていることに一致しておりました。

この地域の子どもたちの大半は、高校を卒業したらこの地域を出てきます。これは仕方ないことですが、私の教え子の中にも進学先を卒業後に帰ってきて就職する者もおりますし、就職してから離職をしてこちらに帰ってきて農業をしたり、地元の事業所に勤めたりする子どもたちも少なくありません。いろんな事情があるにしろ、みんな郷土愛を持っていて、一回出て行ってもまた帰ってくる。そういう子どもたちが多いと思います。出て行っても、決して郷土愛を忘れたわけではなく、遠くにいても郷土のことを思っている子どもたちも多いと信じています。

学校というのは、都会へ出て活躍する人たちを輩出してもらわなくてはいけませんし、故郷に帰ってきて、あるいは、残って活躍するような人材を育成する場でもなければならぬと思います。どちらにせよ故郷を愛して故郷のために働いてくれる人材、そういう子どもたちを多く輩出すれば、やがて故郷が活性化されて、働きやすく住みやすい幸せな生活ができる良い故郷を創り上げていく気がしています。

そういった意味で魅力ある郷土を創る意欲と熱意のある人間を育てる学校、働きやすく働きやすく魅力ある故郷づくりの中核を担う学校であってほしいと思います。

(辻本委員)

紀南中学校長会でもこれまで両校の活性化に向け、まさに小・中・高が連携して高校の活性化につながるような話をしていこうと、ここ数年議論を重ねて来ています。ここには、その議論をベースに意見を書かせていただきました。ただ、意見を集約する機会や時間がなかったので、それらを総括するような形で整理させていただきました。

(大森会長)

また改めて出していただくということですね。校長会の合意を得た後にもう一度出していただけると。

(辻本委員)

ただ、この意見は中学校の全校長に周知し、こういう形で出すという了解はもらっていますので、これをお願いしたいと思います。

そういう意味で言えば、これ以外に防災の面であったり、あるいは校舎制の問題であったり、いろんな意見が出ていますが、その一分類ということでご理解をいただきたいと思います。

また、「育てたい地域の子ども像」ですが、大きく分けて2つの柱です。一つは学力保障、もう一つは将来設計。これは小・中・高を通じたということで、まさにキャリア教育につながってくる部分だと思います。特に2つ目にありますように、この地域を考えていったときに、小学校でも中学校でも総合的な学習時間の中で様々な体験学習あるいは地域学習をさせていただいております。その中には地域の方の参画もあり、地域の方から学ばせていただくことがたくさんあります。その中で地域の良さを

知り、あるいは逆に地域の厳しさも知っていくという場面が多く、多くの学校でなされていることもあると思います。まさにその延長上にあるのが紀南高校のインターンシップではないかという気もしております。

学力保障や将来設計を小・中・高で連携をしながら進めていく中で、最終的に高校のどういう形が望まれるのかということで、「期待する学校像」として右側にありますが、進路保障になってくると思います。ここについては何もないところから新しいものをということではなく、今、紀南高校と木本高校が持っている理想図をきちんと活用しながら考えていくという意味で、進学については木本高校の文理コースを更に発展させて進めてほしい。就職についても紀南高校のインターンシップを発展させる形で、就労体験が地域の企業への就職につながっていくような、本当の意味でのデュアルシステムという部分を地域の活性化に向けた地元企業との連携、あるいはコラボレーションという形で進めていくのが目指す方向ではないかと考えています。

(山本委員)

小中教職員ということで話を聞かせてもらいましたが、途中経過です。ですので、もしこれ以外のことが今後出てくるようなことがあれば、またそのときに話をさせていただきます。

「育てたい地域の子ども像」のところでは、主に5点ぐらいのことが出ていたと思います。ここに書いているとおりです。最後のところで、地域内に就職する子どもも多いということから、ふるさとの紀南地域のことを大切に考えられる子どもを育てていきたいという話もありましたのでここにあげました。

「期待する学校像」のほうですが、子どもが魅力を感じられる学校、子どもの多様なニーズに対応できる学校、これは今までも出ています。それから、安全でかつ避難場所的な学校ということで、これは津波、水害の恐れのあるところのない学校がほしいという意見があったのでここにあげました。子どもたちが通いやすい学校、これは立地条件の整ったということで、通学にかかる時間、交通費の負担の少ない場所に、もし学校を新しく建てられるのであれば、そこに建ててほしいという意見でした。

その中で具体的な意見として2校存続、あるいは統合という話が出ましたので、ここにあげました。これについては寺本委員からお願いします。

(寺本委員)

職員の中で話を聞かせてもらおうと、今の紀南高校、木本高校が、今の子どもたちが行きたい高校、このようなことを学習したい高校であるので、すごくもったいないという思いがあります。近くに学校があって、そこへ行きたい子どもたちが今いること、また、子どもの選択の幅が広げられるということで、理想は2校の存続という意見が職員の中にもあります。

ただ、どうしても人数が少ない中での活性化の方向よりも、活力ある活動ができるという考えの中で、統合していく方向になるのかとの意見も教職員の中にもあります。その中でこの会議も進んでいるという思いが自分の中にもあります。

今の紀南高校、木本高校での活動の中から、1点目や2点目の点でやってみたいことはありますが、3点目にあげた安全で、かつ避難場所としての学校ということですが、もし統合するのであれば、津波の心配のない新校舎という形を一番期待したいと

思います。中身的には今の高校の形を受ける形でできないかという話をしています。

新しい学校をつくることは、今の地域の人たちや子どもたちにとっても、「新しい学校ができるんだ」という新鮮な気持ちになるということとか、その下にも書きましたが、これを機会に良いところを取り入れるイメージで新校舎を建てて、新しい高校を新設するというので、そのような意向がいいという意見を出していただきました。

(谷合委員)

「育てたい地域の子ども像」については、校内の運営委員にも意見を募りました。思いのほか、同じようなことが書かれていまして、この2点にまとめました。1点目は皆様がおっしゃっていることと重なると思います。2点目は、先ほども少し述べたとおりで、予測不能というか、なかなか見通せない中で、たくましく生きていく子どもたちが育てられればと思っています。

「期待する学校像」については、今の木本高校をイメージしながら、それに私なりの思いを一つ二つ付け加えた形でまとめています。

1点目から4点目までは、表現は違っても皆様がおっしゃっているような部分かと思えます。5点目につきましては、例えば、この地域の交通環境が最近随分変わってきていますが、そういう新しい環境の中で、新しい発想で、今までにないものをこの地で考えて実践していけるような子どもたちを育てられるような学校ができないかということで、自分の願いを込めて付け加えました。

(堀川委員)

「育てたい地域の子ども像」ですが、1つ目が、とにかく主体的に自らの道を切り開くことのできる子ども。2つ目は、自らの可能性を求めひたむきに努力する子ども。例えば、難しいことではなくて、学業と部活動の両立ということなどの想定をしております。3つ目は、地域に深い愛情と誇りを持ち、明日の地域を担い、社会の発展に寄与する人材。ここでは過疎化が急速に進んでおります。ですから、地域に根を下ろすという意味では、生業興し、起業家、地域イノベーションという発想も大事かと思えます。4つ目は、そこに細かく書いてありますが、①②③④という当たり前のことが普通にできる子ども。5つ目は、グローバル社会の進展の中で活躍が期待できる子ども。大げさなことではなく、世界を股にかけるということではなく、これからは経済活動において地域と外国が直接的に結び付きやすいということだろうという意味合いです。

「期待する学校像」は、学力、進路保障が図れる学校。いずれにしても、ありとあらゆる地域の子どもたちを受け入れる学校ということ想定しなければならないと思います。少し大げさな表現かもしれませんが、例えば、東大に行く生徒もいれば、プロ野球選手になる生徒もいるといった、多様な卒業生を輩出できる学校になればと思います。2つ目は、ここに書いたとおりで、地域総がかりでの活動が、より推進できるという学校です。3つ目が部活動の充実した学校。これは裾野を広げることと、あるいは、活動の場、指導者をいかに確保していくかということが大事だと思います。しかしながら、これからは従来の学校レベルの部活動という枠組みだけでは賄うのは非常に難しい。ですから、小・中・高の学校種、市町の壁を越えたスポーツコミュニティ的なものを形成していくことが大事かと思えます。そのことによって、

早い段階から未来のアスリートを育成することも可能になるのではないかと思います。4つ目は、安心・安全の2つの側面です。一つは、防災体制。津波や水害などを心配しなくてもよい学校。夜中に地震が起こらないか、津波が来ないかということを実際に切実に心配しております。もう一つは、安心に通える落ち着いた学校。風紀の安定した、いじめなどのない学校です。最後、5つ目は、グローバル社会の進展の中でということとリンクしますが、難しいことではなく国際理解教育を推進する学校ということになります。

(新谷委員)

一応、紀南高校と木本高校の職員代表という形で私は意見を述べさせていただきます。谷合委員から木本高校の職員の運営委員会レベルでの先生方の意見を言っていたので、どちらかといえば紀南高校よりの意見を述べさせていただくかもしれません。

オフサイトミーティングと言いまして、学校を離れてこの議論をしようということで、共通テーマは「紀南高校の今後」ということで、先生たちと話し合いをしました。あえてこのプリントにも書きましたが、現状をきちっと把握していただきたい。今日も前半で学力の問題が出ていましたが、紀南高校の先生たちが感じていることとして、幅広い学力の生徒がいるという状況、それから基礎的学力の不足、学習習慣の欠如、凡例的な学力を求められる就職試験、携帯が手放せないというのが一番問題になりますがそういう生徒たちの現状、友人関係をとても気にする生徒、悪いことを止める仲間がない等、そんな話が出され、現状と目指す生徒、先生たちが求める生徒像、それから、生徒たちに対して期待する生徒像ということで、このようにまとまってきました。

今申しましたように、特に紀南高校の職員たちが感じていることとは、上から5番目、特別支援及びグレーゾーンの生徒の増加に限界を感じるという部分があります。これは私たちの学校の問題かもしれませんが、小中学校でも感じておられる部分があるかと思えます。発達障がいの部分で支援が必要な生徒たちが大変増えているような感じがいたします。その部分に対してきちんと手を差し延べていきたい。携帯が手放せない、家庭での学習時間のこと等もありましたが、そんなところも非常に懸念している部分です。当然、「目指す生徒像」としては、倫理観、自己肯定感を持ち、周りの悪い意見に左右されない子どもということで、今、皆さんが縷々述べてこられたところと変わらないと思えます。

それから、一番下の地域を支える人材、下から2番目の政治感覚や社会感覚を持ち、スケールの大きな度量を持った子ども。もちろんこのあたりは十分我々が期待するところでは。

さて、「目指す学校像」についてです。紀南高校と木本高校では、2人の委員（校長）もずっと述べてきたことですが、活性化への動きにおいて先生たちは、皆様を感じていらっしゃるように2校は頑張っていると思えます。頑張って、更に地域のニーズに応えるために、これから一つにまとまっていくところを考えながら、学校を創造していかなければいけないと思っています。

皆様の家庭に配付されましたこの新聞をご存じでしょうか。これは私立学校の広報

誌です。私はこの表紙を開いて愕然としました。レストランで食事をとって、その食事がおいしいねと言いながら先生たちと歓談をする保護者たちの姿。こんな学校をこの地域は求めているのでしょうか。私はこれを挑戦状だと思いました。私たちは、県立高校、なおかつ、この地域の子どもたちを育てる視点で教師をしています。もちろんいろんな理念はありますし、でも、この一部のセレブ的な感覚を持った子どもたち、あるいは保護者たちに対して尻尾を振るような教育を私はしたくないです。

地域の人材を育てている教員の育成、④になります。なぜこれを書いたかというのと、「先生、紀南高校で先生ができる先生をつくろう」、「そんなコースを作ろう」。若い先生の意見ですが、紀南高校で先生をできる先生を養成する、大学とタイアップして、うちの卒業生を先生にしてくださいというふうに育てていって母校に戻していく。これは一つの理想というか、そんなコースが学校の中に一つあっていいのではないかと思います。

もう1つ、⑤ですが、先ほど小・中・高連携という話が出ました。さらに、小・中・高・特別支援を一つにした大きな学校、これはひょっとしたらこの地域の求める理想的な学校ではないかと思います。小中学校を県立でというのはなかなか難しいかもしれませんが、それが一つの学校の中にある、そんな学校はできないでしょうか。それをやることによって何ができるか、もちろん小中高一貫12年でどんな子どもを育てるかというビジョンが出てきます。さらには、中高一貫校がやっているような、中学校時代に前倒しで高校の授業を教えたり、あるいは、その内容に踏み込んだりすることも可能になっていくと思います。いろんなことが可能になってきますし、さらには特別支援の部分を取り込みながら、その子どもたちに対しての思いやりや様々な気持ちも育てていくことができるでしょう。それらを一つにまとめて大きな学校として考えていくというアイデアが若い先生たちから出されました。「それもいいね」と議論を進めました。ぜひ、今回はそんな具体的な議論が出たらありがたいと思っています。

(大森会長)

申し訳ないですが、21時前になってきましたが少しお時間をいただいて、私のほうで今日皆様からいただいたご意見のポイントをまとめ、このスクリーンに出させていただきますので、いかがでしょうか。私が今からパソコンで打ち込ませていただきますので、21時5分過ぎまでお時間をいただけないでしょうか。その間、休憩ということをお願いできますか。

～ 休 憩 ～

(大森会長)

今、皆様のご意見をお伺いしまして、私のほうで言葉がいろいろとあったので、今回のこの検討ではP連からのご意見もあると思いますが、現時点でポイントをまとめさせていただきました。

1つ目は、「思いやりの心と学力」を持った子ども。学力担保という言葉については、いろいろな学力があり、まだ固まっていないので、学力という言葉でまとめました。

2つ目が、「部活動の充実」。

3つ目が、これは会社、企業とかいろいろありましたが、まとめますと「キャリア教育」。ただし、これは地域で働く子どもいるし、世界へということもありましたので、「グローバル人材」も含んでいます。

4つ目です。進路実現ということでしたが、これは小学校の子どもたちから言えば、「子どもの夢が実現できる教育」になると思います。

5つ目です。連携と言いましたが、連携にもいろいろあります。本当に全部です。「学校、保護者、地域」、そして、それ以外の「小中高特別支援学校の連携による教育力の向上」。先ほど前半からもありましたように、いろいろと連携をすることで学ぶことがあるということもありましたので、このような形にしました。

6つ目、これは「地域」という言葉より「ふるさと」が良いかと思います。「ふるさとを思い、ふるさとを支え、ふるさとへ貢献できる人材」です。

7つ目に、安全・安心というのがいつもの三重県のキーワードですが、ここへさらに、通いやすい学校という言葉を入れて「安全・安心、通いやすい学校」です。

このような形で7つにまとめさせていただきました。

この件について、皆様から忌憚なくご意見をいただきたいのですが、よろしくお願ひします。これは現時点でのことです。印刷したものを後でまた事務局を通じて皆様には配付させていただきます。ご意見がございましたらよろしくお願ひします。

よろしいでしょうか。それでは、3の「その他」にまいりたいと思いますが、樫山委員、その他で御意見があるとのことでしたが。

(3) その他

(樫山委員)

本日の協議事項の1つ目、「生徒の進路実現につながる「学力の向上」を中心とした小・中・高連携の推進について」というのは、前年度からの申し送りの協議事項だったと思いますが、今回の協議で終わりになるのですか。前回確認した今年度の協議の進め方では、次回以降の協議内容に入っていないですが、まず、そこを一つ。

(大森会長)

樫山委員は必要があると考えられていますか。

(樫山委員)

どうなのかなと思ひまして。

(大森会長)

必要があれば、また次回に入れますが、樫山委員はどうお考えかお伺ひしたいのですが。

(樫山委員)

前年度からどのような流れでこの協議となったのか。今日みたいな議論だったら私は必要ないと思ひます。

(大森会長)

事務局から簡単に経緯説明願えますか。

(樫山委員)

前回にいただいた資料の18ページ、今後の協議の進め方についての案です。

(大森会長)

他の委員の方から、樫山委員のご意見について何かありましたら。

(樫山委員)

続けさせてもらっていいですか。なぜかという、学力向上は大切なことだとは思いますが、全国学力・学習状況調査の結果をもって、この協議会でどうしていくのかという議論はなかなか進めていきづらいと思います。先ほど会長もまとめていただきましたが、地域も含めて家庭や学校が協力・連携して、どう子どもの学力を鍛えていくのかということは、ここでの協議にはそぐわないかと私は思いました。

それから本日出していただいている資料3についてです。これは多分この地域の小中学校での学習内容よりも、近大附属新宮中学校での高い学習環境を求めていく生徒がこんなに増えてきましたという資料なのかと推測します。しかし、この資料を提示された意味もちょっと分からないのですが、多分そうなのかと考えたときに、先ほど久保委員からもありましたが、私も何人かから聞いていますが、小学校から近大附属新宮中学校へなぜ行くのかといたら、近大に入りやすいからです。近大の医学部や看護系に進学したいから、近大附属新宮中学校から行く、そのまま行けますから。ここで近大附属新宮中学校又は近大附属新宮高校がいいから子どもが流れているということよりも、私は近畿大学の評判、特に医学部、近大高専が移転したので理工学部もそうです。だから、ここ2年間、特に紀宝町からは人数的にも。高専がなくなって近大に進学しようと思ったら、近大附属新宮中学・高校へ行って、そのまま上がっていくというパターンが最近増えているのではないかとこの感じがします。

もう1つですが、4ページの資料4の中で、四年制の大学に何人、短期大学に何人、就職者は何人というように数、実績は出ています。具体的には紀南高校なら平成25年度は69人が就職していますが、実際、子どもたちの何人が地元就職を希望していたか。何人の者が就職希望で紀南高校に入学し、卒業するときに何人がそれを実現したかという数字が大事だと私は思います。四年制大学へ8人進学したという結果について、今までよりも多いとか少ないということよりも、四年制大学に進学するという希望を持って紀南高校へ入学した生徒が8人いて、8人ともが希望どおりに、もちろん理系や経済とかといった中身も含めて8人が希望を実現したのなら、私はすごくいいと思います。しかし、この数字の中身が子どもたちの希望に沿った状態かどうかというのが、この数字だけでは分からないので、どうなのかと思いました。

(事務局：辻班長)

本日の協議事項の(1)を設定した経緯などを説明させていただきます。

まず、本日の資料3、小学校から中学校への進学状況ですが、これは昨年度も資料としてお出ししました。他地域でもあることですが、小学校から中学校への進学時に生徒が少なくなっているのではないかとこのご意見もあり、この地域もそのような状況があってお出ししました。去年あたりから、小学校から中学校に進学する段階で他県に進学している状況が見られます。このような状況を受けて、昨年度、2月28日に開催した第2回の協議会でのご意見の中に、「学力向上のために中高がしっかり連携を取って、小学校卒業段階での県外私立中学校への進学を止めなければ、統合が早まりかねないのではないか」ということがありました。また、「中学校と高校だけで

なく、小学校も含めて連携を図りながら、学力を向上させていくことで、他県に進学していくことの歯止めになるのではないか」というご意見もありましたので、今年度、協議テーマの一つとして設定しました。

まだまだ協議が尽くせないということであれば、次回以降も協議会において、二本立てということで設定させていただくこともあります。また、会長から諮っていただければと思います。

それから、木本高校、紀南高校において、どれぐらいの生徒が進路において入学時の希望を叶えたかということについては、学校と相談しながら、どんな内容の資料が出せるか分かりませんが、資料を作っていたらと思います。

(大森会長)

先ほど榎山委員からご意見がありました「生徒の進路実現につながる「学力の向上」を中心とした小・中・高連携の推進について」の協議が、次回も必要かどうかということに関わってどうでしょうか。ご意見がありましたらお願いします。私としては、先ほど榎山委員が言われたように、この協議会で進めていく話とは違うかと考えておりますので、今回限りにさせていただきたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

それでは、今回限りということでお願いできますか。

あと、何かございますか。

(西委員)

今回資料8で提供させていただきました平成25年度の全国学力・学習状況調査の結果ですが、紀宝町では保護者にしか提供しておりませんので、今回、この場で協力をとということで出させていただきましたが、今回の目的以外に使用されることがないようお願いをしておきたいと思っております。事務局にはお願いしてありますので、ご理解のほどよろしく申し上げます。

静岡県がどうなっているかという現状をご存じかと思いますが、昨年度、国語Aについて全国平均よりも良かった学校の校長名を公表したところ、あるところから学校名や市町の何%の学校かということ公表されました。そこまでならまだよかったです。それが地価にまで影響していると言われております。今年も既に校長名を出したところ学校名がネットで流れています。静岡県のほうに直接聞きましたが、早かったということで、そういう我々と関係のないところでいろんな動き方をするのがこの調査の結果ですので、そういった認識も必要だと思っておりますのでお願いします。

(大森会長)

私からもお願いしたいのですが、これは取扱注意でお願いします。

それでは何かほかになれば、今日は終わらせていただきたいと思います。

長い時間、ありがとうございました。

4 連絡事項

(事務局)

大森会長、協議の進行をありがとうございました。

事務的な連絡を3点させていただきます。

1点目、旅費に関する書類についてです。机の上に置かせていただいております委

員で、まだご提出いただいてない方は、お帰りの際に事務局に提出をお願いします。小中学校の委員の方々におかれましては、案内で差し上げたとおりの請求方法でお願いいたします。

2点目ですが、駐車券の無料処理がまだの方は、お帰りの際にお申し付けください。

3点目です。次回第3回の協議会は、会場を押さえる加減もありまして、随分前に皆様方に11月25日火曜日、この会場で同時刻からということでお伺いをし、設定をさせていただきました。ただ、伺った時期が早かったこともあり、その後、複数の方が、ご都合が悪い状況になり得るかもしれないというお話をいただいておりますので、再度、日時について検討させていただきたいと思います。場合によっては、開催日を変更させていただくこともあり得るということをご了解いただきたいと思います。

閉 会 (事務局)

これをもちまして閉会いたします。お気をつけてお帰りください。どうもありがとうございました。

第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会 で確認された内容（9月12日時点）

将来的に新たな学校を設置する場合の
「育てたい地域の子どもの像」「期待する学校像」
について

1. 思いやりの心と学力
2. 部活動の充実
3. キャリア教育（グローバル人材も含む）
4. 子どもの夢が実現できる教育
5. 学校・保護者・地域・小中高特別支援学
校の連携による教育力の向上
6. ふるさとを思い、ふるさとを支え、ふる
さとへ貢献できる人材
7. 安全・安心・通いやすい学校